

## 5 外国語活動, 外国語科

### (1) 外国語活動, 外国語科における学習内容の関連

外国語活動, 外国語科における思考力・判断力・表現力は, 外国語を通じて物事を思考, 判断したり, 使用する外国語や伝え方を工夫して表現したりするコミュニケーションの場面で最も発揮されるものである。

外国語活動では, このような場面においてコミュニケーション能力の素地が総合的に表出されていると考えられる。ここで言うコミュニケーション能力の素地とは, コミュニケーションへの関心・意欲・態度, 外国語への慣れ親しみ, 言語や文化に関する気付きのことである。このことから, 次に示す評価の3観点から思考力・判断力・表現力を捉える。

観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
趣旨	コミュニケーションに関心を持ち, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら, 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して, 言語の面白さや豊かさ, 多様なもの見方や考え方があることなどに気付いている。

外国語科においては, 技能の統合的活用の場面で思考力・判断力・表現力の見取りを行うことから, 次の評価の4観点のうち, 主として「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の観点から思考力・判断力・表現力を捉える。

観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
趣旨	コミュニケーションに関心を持ち, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして, 自分の考えなどを表現している。	外国語を聞いたり読んだりして, 話し手や書き手の意向などを理解している。	外国語の学習を通して, 言語やその運用についての知識を身に付けているとともに, その背景にある文化などを理解している。

児童生徒に思考力・判断力・表現力を継続して育成するには, 既習単元における学習内容を本単元に結び付ける視点をもつことが大切である。単元間における題材・テーマ, 言語の使用場面, 言語の働きなどを関連付けて捉えることにより, 外国語活動では, 慣れ親しんだ外国語を本単元で想起させ, 児童の発想やコミュニケーションを図る活動を充実させることができる。

外国語科では, 例えば, 既習単元において活用した言語材料や言語の使用場面を想起させることで, より多様な言語材料を用いた表現活動に導くことが可能となる(図31)。

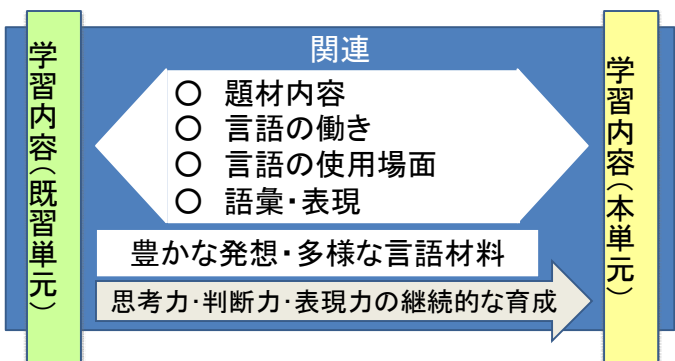


図31 外国語活動, 外国語科の学習内容の関連

(2) 外国語活動、外国語科における学習内容の関連を踏まえた指導

ア 知識・技能の活用を図る学習活動

思考力・判断力・表現力を育成するためには、学習内容の関連を踏まえた知識・技能の活用を図る学習活動の設定が効果的である。

外国語活動、外国語科においては、既習單元において設定した言語の使用場面や、活用した言語材料・表現形式等を本單元に効果的に取り入れることが考えられる。

例えば、表15に示すように、既習単元の果物、スポーツ、動物などの単語や、好きなものを伝え合う表現は、本單元でも活用することができる。ただし、外国語活動においては、語彙や表現の定着まで求めているため、外国語への慣れ親しみだけに焦点を当てるのではなく、関心・意欲・態度や気付きについても、既習單元との関連に留意

しながら指導していく必要がある。具体的には表16に示すように、教師の発問や助言などの働き掛けにより、既習單元における気付きやコミュニケーションへの関心・意欲・態度を本單元でも生かす工夫をすることである。

イ 見通し・振り返り学習活動

既習單元における知識・技能を活用させるには、本單元で指導する際に、表17で示したような指導の視点をもつことが大切である。このような視点をもつことにより、児童生徒に課題解決に向けた見通しをもたせるとともに、振り返りによって継続した学習の有用性に気付かせることができる。また、既習單元

と本單元において習得・活用しておくべき知識・技能を明らかにすることが可能となり、「判断の要素」や「判断基準」の妥当性をより高めることができると考える。

表15 学習内容の関連を図る例("Hi, friends!" 1 L4&L5)

前回(既習單元)	今回(本單元)
L4 I like apples. 好きな果物, スポーツ, 動物について積極的に聞いたり話したりする活動	L5 What do you like? 色や形の好み, 好きなものは何かを聞いたり話したりする活動
観 点	L5 で関連付ける L4 の学習内容
関心・意欲・態度	相手意識をもった, 積極的な態度 (表情, うなずき, ジェスチャー等)
慣れ親しみ	果物, スポーツ, 動物などの単語を使い, 好きなものを伝え合う表現
気付き	日本語と英語の発音の違い

表16 学習内容の関連を踏まえた指導例("Hi, friends!" 1 L4&L5)

評価の観点と活動場面	教師の発問や助言などの働き掛けの例
【気付き】 日本語と英語の音の違いに気付く。 (第1時)	T 「L4 では, オレンジが oranges というように, 日本語と英語の音の違いを勉強しました。今日勉強した T シャツの模様や色にも同じような違いがありませんでしたか。」 S 「トライアングルと triangle が違いました。」
【慣れ親しみ】 What ~ do you like? を繰り返し使う。 (第3時)	T 「好きな color, shape で T シャツを作ることができましたね。今使った What ~ do you like? の『~』を変えるといろいろな質問ができます。L4 での活動からどんな質問ができますか。」 S 「スポーツ, フルーツも質問できます。」
【関心・意欲・態度】 自分の好きなものを伝え合う。 (第4時)	T 「これからインタビューの活動を行います。お互いに気持ちよく英語で聞いたり, 話したりするために, 前の單元 (L4) から特に気を付けてきたことは何ですか。」 S 「始める前に挨拶することと, 相手の目を見て話をする事です。」

表17 見通し・振り返り学習活動における指導の視点

指導場面	外国語活動	外国語科
見通し (学習課題の設定)	○ 課題から必要とする学習内容をつかませる。 ○ 既習單元で慣れ親しんだ表現の有用性を感じさせる。	○ 既習單元で習得した知識・技能の有用性を感じさせる。
言語材料の選択	○ 本單元で扱う言語材料の選択と慣れ親しませるための活動を設定する。 ○ 既習單元で慣れ親しんだ言語材料を活動の場面に組み込む。	○ 本單元で習得させる言語材料の選択と習得のための活動を設定する。 ○ 既習單元で習得した言語材料を活動の場面に組み込む。
理解・表現の活動	○ 既習單元及び本單元で慣れ親しんだ言語材料を扱う活動を設定する。	○ 既習単元のスキーマや内容理解の方法を活用させる。 ○ 内容理解を基に, 既習單元及び本單元で習得した言語材料を活用する活動を設定する。
振り返り	○ 既習單元から本單元にかけて児童生徒に能力の向上を認識させる。 ○ 継続した学習の有用性を感じさせる。	

(3) 外国語活動，外国語科における学習内容の関連を踏まえた「判断の要素」・「判断基準」の設定と評価

ア 「判断の要素」・「判断基準」の設定

外国語活動においては，評価規準に表されている内容を，3観点から分析し「判断の要素」として端的に示すことで，指導のポイントが明確になる。

外国語科においては，外国語表現の能力，外国語理解の能力の2観点から評価規準を設定し，その評価規準を分析的に具体化した「判断の要素」に基づいて「判断基準」を設定する。その際，単元間において共通または類似する題材，言語の使用場面，言語の働き，言語材料を明らかにした上で，「判断の要素」や「判断基準」を設定することで，既習単元と本単元との関連を効果的に図ることが可能となる（表18）。

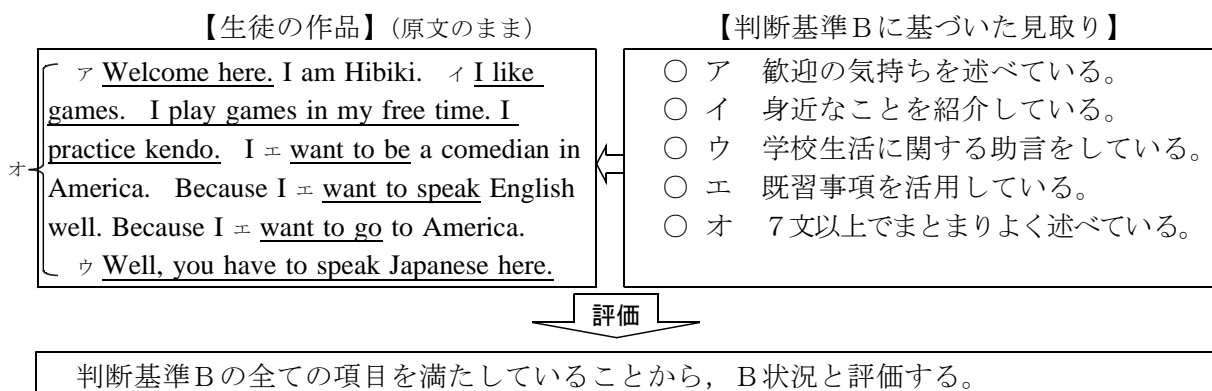
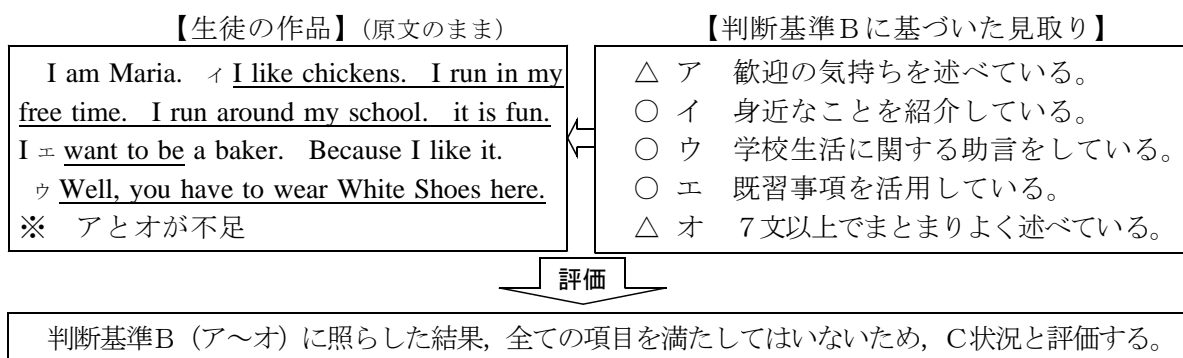
表18 学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定例（中学2年 "New Horizon English Course 2"）

既習単元 単元名: Unit 3 My Future Job	本単元 単元名: Unit 4 Homestay in the United States	
<b>評価規準</b>		
○ 将来の職業と英語学習についての対話文を読み，これまで学んだ表現を用いて，職業選択について自分の感想や考えを5文以上の英文で書くことができる。	○ ホームステイの注意点についての記述を読み，これまで学んだ表現を用いて，日本に来た留学生に対してのアドバイスを含んだメッセージカードを7文以上の英文で書くことができる。	4技能の統合的な活動に関する評価規準
<b>判断の要素</b>		
ア 内容に関する記述 イ 自分の気持ちや価値観に関する記述 ウ 今後の自分の行動に関する記述 エ 既習事項の活用 オ 英文の量	ア 内容を基にした記述 イ 自分の気持ちや価値観に関する記述 ウ 相手の行動に関する記述 エ 既習事項の活用 オ 英文の量	評価規準を2観点から分析し，既習単元との関連を踏まえ，どのような基準で評価するのか端的に設定
<b>判断基準B</b>		
ア トピックを提示している。登場人物について述べている。 イ 登場人物の将来の職業に関して，自分の気持ちや価値観を述べている。 ウ 自分の就きたい職業とこれからの自分の行動について述べている。 エ 不定詞，未来形等を活用している。 オ 5文以上の英文で述べている。	ア 留学生と仲良くなるためのメッセージカードで歓迎の気持ちを述べている。 イ 自分自身の身近なことについて紹介している。 ウ 学校生活に関する助言をしている。 エ 忠告や助言に使われる表現を活用している。 オ 7文以上の英文でまとまりよく述べている。	既習単元における「判断基準」を参考に，「判断の要素」に基づき，より具体的に設定

「判断基準」を設定することにより，目指す生徒の姿が明確になり，単元終末の言語活動に至るまでの指導が充実する。また，関連させる既習単元及び本単元における判断基準Bに着目することで，生徒の思考力・判断力・表現力の向上の程度を把握することができる。「思考・判断・表現」をおおむね満足できる学習状況で示したものが判断基準Bであることから，既習単元と比較することで，本単元における判断基準Bの妥当性を精査することができる。具体的には，既習単元での生徒の学習状況から，本単元で目指す生徒の姿が適切か，4技能の統合的な活動のねらいと評価の各項目は整合しているかなどを確認することである。

イ 「判断の要素」・「判断基準」に基づく評価

本単元において設定した「判断の要素」・「判断基準」に基づくと，児童生徒の活動や作品を通しての「思考・判断・表現」の見取りが的確に行われ，事後指導の際のポイントが明確になる。次は，表18で示した本単元における，二人の生徒の作品と判断基準Bに基づいた評価例である。



(4) 外国語科における「判断基準」に基づく評価結果を踏まえた指導

ア 補充指導

判断基準Bに到達していない生徒に対して、生徒の作品と判断基準Bの各項目と照らして補充指導を行う。その際、他の生徒の作品を鑑賞させたり、既習単元で作成した英作文を参照し、英文展開や言語材料等を参考にさせたりすることによって、気付きを促すことが可能である。例えば、前項で述べた、C状況にある生徒には、「歓迎の気持ちを表す表現」と「まとまりのある英文作成に必要な言語材料」の視点から指導を行った。以下に、補充指導後の生徒の英文を示す。

Welcome to Satsumasendai. I am Maria. I like to run. I run around my school in my free time. It is fun. I want to be a baker because I like cooking.  
Well, you have to wear white shoes in my school.

イ 深化指導

判断基準Bに到達している生徒に対しては深化指導を行う。深化指導とは、「判断基準Bに加えて、例えば、更にまとまりのある英文作成ができています。」などの判断基準Aに到達させるための指導である。前項のB状況にある生徒に対しては、英作文を更に充実させるために「修飾語句を効果的に用いて、自分自身の紹介を充実させるようモデルを提示する。」「更にまとまりのある英文となるように談話標識を複数提示したり具体例を挙げるときに有効な副詞を提示したりする。」などの指導を行った。以下に、深化指導後の生徒の英文を示す。

Welcome here. I am Hibiki. I practice kendo every day. I like to play games in my free time. I want to go to America because my dream is to be a comedian there. So I want to speak English well.  
Well, you have to speak Japanese here.

判断基準Aは固定的に捉えるものではないことから、個々の生徒の実態や能力を考慮し、達成可能な範囲で指導することが必要である。

(5) 各学校の実践例

ア 小学校第6学年 単元名 Lesson 3 I can swim. (Hi, friends! 2)

(ア) 学習内容の関連を踏まえた言語活動の充実

○ 学習内容の関連

本実践においては、既習単元の「友達の自己紹介を聞いたり、自分のことについて紹介したりする活動」における学習内容と「自分ができることやできないことについて聞いたり話したりする活動」における学習内容の関連を踏まえる。相手のことを尋ねたり、自分のことについて説明したりするという、題材及び言語の働きの類似性から、既習単元と本単元の学習内容を効果的に結び付けることができると考える。

○ 本単元における、慣れ親しんだ表現・技能の活用を図る学習活動

本単元においては、表 19 に示す観点のそれぞれについて、教師による働き掛けを行うことにより、既習単元の学習内容との関連を踏まえた指導を行う。

表 19 学習内容の関連を踏まえた指導

観点	本単元で関連付ける既習単元の内容	本単元における教師の働き掛け
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インタビュー活動をするときの留意点の確認</li> </ul>
外国語への慣れ親しみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分について述べる表現 (I'm ○○. My birthday is (日付). I like ~. I play ~.等) ※ I like ~. I play ~.は第5学年時の既習表現</li> <li>単語(月の名前, 日付の言い方), 基本的表現(挨拶など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲームや“Who am I?”クイズにおける既習表現の提示の繰り返し</li> <li>既習表現を想起させる場面の設定</li> </ul>
言語や文化に関する気付き	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語と英語では言葉の使い方が異なること(日付の数字の言い方など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語と英語の言葉の共通点や相違点の確認(遊びの呼び方など)</li> </ul>

このような指導を行うことにより、外国語に慣れ親しませ、言葉の面白さや豊かさに気付かせ、コミュニケーションを図る楽しさを体験させることを通して、思考力・判断力・表現力の育成を図ることができると考える。

○ 本単元における、見通し・振り返り学習活動

「聞く活動」から「慣れる活動」を経て、「自分で言葉を選んで表現する活動」に至るまでの学習過程は、既習単元とも共通している。そのため、児童はスムーズに活動に取り組み、既習単元で慣れ親しんだ表現を活用する場面を意識することもできると考える。

本単元における学習課題は、「できること」や「できないこと」を含めた“Who am I?”クイズを通して、友達のことや自分のことについて尋ねたり答えたりすることである。この課題を設定することにより、児童は、本単元の終末における見通しをもつことができる。さらに、今回関連を図る表現に加えて、第5学年時に扱った I like ~. I play ~.などの表現を活用することで、自分についてより多くの情報を伝えられることに気付かせることができる。

終末においては、使用した表現を振り返らせることにより、スキットや発表の内容の質の高まりを認識させ、継続した学習の有用性を感じさせることができる。また、外国語と日本語の共通点や相違点について発表させることで、言葉の面白さや豊かさに対する気付きを促すようにする。

(イ) 学習内容の関連を踏まえた「判断の要素」の設定

	既習単元	本単元
	単元名 : Lesson 2 When is your birthday?	単元名 : Lesson 3 I can swim.
<b>評価規準</b>		
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 進んで誕生日を尋ねたり答えたりしている。</li> <li>○ 誕生日を含んだ自分の情報を積極的に伝えようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 状況に応じた表現やジェスチャーを用いながら、できることやできないことについて相手に伝えようとしたり、聞こうとしたりしている。</li> </ul>
外国語への慣れ親しみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 誕生日を尋ねたり、答えたりしている。</li> <li>○ 誕生日を含んだ友達の情報を知り、自分の情報を伝えたりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 動作を表す語や、「できる」、「できない」という表現を聞いたり言ったりしている。</li> <li>○ できるかどうかを尋ねたり答えたりしている。</li> </ul>
言語や文化に関する気付き	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 時期や季節によって世界には祭りや行事があることに気付いている。</li> <li>○ 日付の数字の言い方の違いに気付いている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 英語と日本語とでは、言葉の使い方が違うことに気付いている。</li> </ul>
<b>判断の要素</b>		
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ コミュニケーションの5ポイントの実践 (Smile. Listen carefully. Eye contact. Clear voice. Reaction.)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ コミュニケーションの5ポイントの実践 (Smile. Listen carefully. Eye contact. Clear voice. Reaction.)</li> </ul>
外国語への慣れ親しみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ My birthday is (月, 日の名前) .の使用</li> <li>○ I'm (自分の名前) .の使用</li> <li>○ 既習表現 (I like~, I play~.) の使用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ Can you ~?/Yes, I can./No, I can't. I can ~./I can't~.などの使用</li> <li>○ これまでに使ったことがある単語や表現の使用</li> <li>○ I'm (自分の名前) .の使用</li> <li>○ My birthday is (月の名前) .の使用</li> </ul>
言語や文化に関する気付き	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 世界各地の祭りや行事の時期の違いについての気付き</li> <li>○ 日付を言うときの数字の言い方の違いの気付き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ スポーツ等の英語での言い方、日本語での言い方の共通点や相違点の気付き</li> </ul>

(ウ) 「判断の要素」に基づく「思考・判断・表現」の指導と評価

以下の観点に関して、期待される児童の姿が見られなかったときの手立てとして次のことを行った。

○ コミュニケーションへの関心・意欲・態度

コミュニケーションを図る上で大切なポイントを黒板に示しながら確認させた。また、手本となる児童の対話の様子を示し、良いところに気付かせることで進んでコミュニケーションを図る姿を意識できるようにした。

○ 外国語への慣れ親しみ

既習単元のピクチャーカードをいつでも見られるように黒板に掲示した。また、既習の表現を想起しやすいように導入時に既習単元でも行ったゲームを取り入れた。

○ 言語や文化に関する気付き

単元の終末に、日本語と英語の言葉の使い方の共通点や相違点について気付いたことを互いに発表させた。

(エ) 成果と課題

○ 学習内容の関連を踏まえたことで、児童が自分たちで場面に必要な表現を思考・判断して選択し、自分の情報をより豊かに表現することにつながった。

○ 振り返りの活動により、多様な外国語に慣れ親しんできていることを実感させたり、成長を感じさせたりすることができた。

△ 各学年の系統性を踏まえた指導計画づくりを進めていく必要がある。

イ 中学校第2学年 単元名：Lesson 4 Enjoy Sushi (New Crown English Series 2)

(ア) 学習内容の関連を踏まえた言語活動の充実

○ 学習内容の関連

本実践においては、既習単元の「読んで理解した内容を基に、自分の体験について述べる活動」における学習内容と「読んだり聞いたりした内容を基に、自分の地域について経験から得たことを基に紹介する活動」における学習内容の関連を踏まえる。自分のことや身近なものについて説明するという、題材及び言語の働きの類似性から、既習単元と本単元の学習内容を効果的に結び付けることができると考える。

○ 本単元における、知識・技能の活用を図る学習活動

既習単元において、生徒は毎時間短い英文を書く活動を通して少しずつ表現や語彙を増やし、修学旅行の体験についてまとまりのある文章を作成した。

学習内容の関連を図ることにより、生徒は既習単元で慣れ親しんだ言語材料を本単元で活用することができ、より確かな定着に結び付けることができる(表20)。そして、地域の紹介を自分の体験に基づいて表現することで、より説得力のある内容になり、表現力を高めることもできる。

表20 本単元で発展的に使用される言語材料の例  
(下線部は共通して用いられる言語材料)

また、単元終末においては、「地域のことを知りたい」と訴える人物の話を書く活動を設定する。それまで増やしてきた表現や語彙をまとめる際に、伝えるべき相手に合わせ

既習単元 (自分の経験についての表現)		本単元 (地域の紹介に関する表現)
<u>I'm going to talk about</u> ～.	→	<u>I'm going to talk about</u> ～.
I went to ○○.	→	There is ○○ in Ibusuki.
I enjoyed □□.	→	You can enjoy □□.
<u>It's nice.</u>	→	<u>It's nice.</u>
We had a good time.	→	You will have a good time.

て表現を見直したり、文章の構成を考えたりさせることで活動の充実を図る。

○ 本単元における、見直し・振り返り学習活動

本単元においては、地域の紹介をするという課題を設定する。学習過程が既習単元と共通しているため、生徒は既習単元で習得した知識・技能を活用する場面を意識して学習を進めることができる。また、表現活動に取り組ませる段階では、既習単元と同様に、どのような英文を用いて、どのような構成で述べればよいかを生徒に事前に確認させることで、見直しをもって活動に取り組めるようにする。

さらに、英文を読み返したり、グループ内で助言し合ったりする活動を行うことで、表現力の向上や継続した学習の有用性を感じさせることができると考える。

(イ) 学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定

既習単元	本単元
単元名：Lesson 1 Aloha	単元名：Lesson 4 Enjoy Sushi
評価規準	
○ 春休みの出来事についての対話文を読み、これまで学んだ表現を用いて、修学旅行の思い出や感想を5文以上の英文で書くことができる。	○ 日本の各地域の食文化や紹介についての記述文や対話文を読み、これまで学んだ表現を用いて、ALTやその家族に、自分の住む地域の紹介文を7文以上の英文で書くことができる。
判断の要素	
ア 内容を基にした記述	ア 内容を基にした記述
イ 自分の気持ちや価値観に関する記述	イ 自分自身のことに関する記述
ウ 自分の修学旅行での体験に関する記述	ウ 地域に関する記述
エ 既習事項の活用	エ 既習事項の活用
オ 英文の量	オ 英文の量

判断基準 B	
ア トピックを提示し、登場人物について述べている。 イ 登場人物の春休みの経験に関して感想や考えを述べている。 ウ 修学旅行での具体的な体験について述べている。 エ 過去の体験を表すための既習表現を活用している。 オ 5文以上の英文で述べている。	ア 読み手に情報を伝える内容となっている。 イ 自分のことについての情報を述べている。 ウ 自分の経験を基にして、自分の住む地域について紹介している。 エ 地域を紹介するための既習表現を活用している。 オ 7文以上の英文で述べている。
【予想される生徒の表現例】 I'm going to talk about a trip. Paul went to Hawaii on March 27. It's nice. We went to Nagasaki and Fukuoka on March 19. We watched a baseball game there. We had a good time.	【予想される生徒の表現例】 Hello, I'm Arata Chinatsu. I like watching movies very much. My favorite movie is "○○." I'm going to talk about Ibusuki. Ibusuki is famous for hot springs. We can relax there. I often go there. There is a big lake near my school. It is Lake Ikeda. I enjoyed fishing there. It was fun. We can enjoy fishing there.
判断基準 A	
○ (判断基準 Bに加えて) 修学旅行の体験について感想を含めて詳しく述べている。	○ (判断基準 Bに加えて) 自分が実際に経験したことを加えるなど、地域の情報を詳しく伝えている。

(ウ) 「判断基準」に基づく「思考・判断・表現」の指導と評価

○ C状況と評価される生徒に対する補充指導

黒板に示したポイントを再度確認させ、自分の表現に加えるべき表現に気付かせるとともに、書き上げた英文をグループ内で発表させ、互いに助言し合う時間を設定した。

○ B状況と評価される生徒に対する深化指導

右の英文は、図32の①で判断基準Bのイ、②でウとエを満たし、かつ、文章全体を通してア、オも満たしているため、この英文はB状況にあると判断した。行動や感想を述べるときに用いる単語を含んだ英文が用いられており、既習単元での学習内容も生かされている。

この生徒に対しては、接続詞が効果的に用いられている英文を紹介した。その結果、英文全体の流れが自然になり、更に読み手に伝わりやすいものになった。

また、別の生徒には、ビデオメッセージへの返事を書くという設定であることから、メッセージの送り主を意識した表現を添えることを助言した結果、図33のような英文を付け加えることができた。

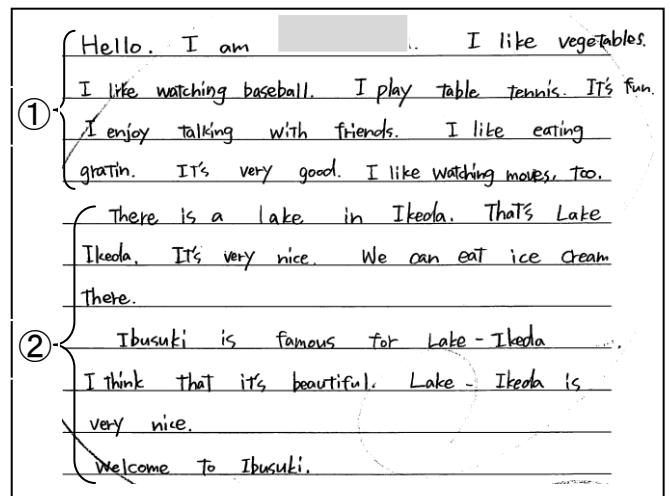


図32 B状況と評価される生徒の英文

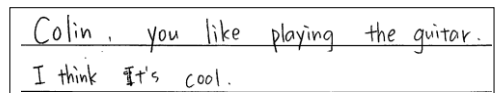


図33 指導後に加えられた表現

(エ) 成果と課題

○ 学習内容の関連を踏まえることで、指導事項の焦点化が図られるとともに、既習の表現を活用させるための活動を取り入れるなど、意図的、計画的な指導が充実した。

○ 表現すべき内容や構成、言語材料が明確になり、教師が想定していた英文の量を超えて表現活動に取り組む姿や、助け合いを活発に行う生徒の姿が見られた。

△ 「判断基準」の設定については、同一学年の単元だけでなく、3年間を見通した学習内容の関連を踏まえて考慮していく必要がある。



ウ 高等学校第3学年 単元名 Lesson 4 Sushi (Vista English Series II)

(ア) 学習内容の関連を踏まえた言語活動の充実

○ 学習内容の関連

本実践においては、既習単元の「内容理解を基にした自分の感想を表現する活動」における学習内容と「内容理解を基にした自分の感想と今後の行動についての主張を表現する活動」における学習内容の関連を踏まえる。環境問題について自分の考えを述べるという、題材・テーマ及び言語の働きなどの類似性から既習単元と本単元の学習内容を効果的に結び付けることができると考える。

○ 本単元における、知識・技能の活用を図る学習活動

世界に広がる寿司文化と漁業に関する英文を読み、自分の感想と今後取るべき行動を含めたまとまりのある英作文を書く活動を設定する。英作文の内容を充実させるために、単元の各時間において、英問英答や音読活動などを通して本文の内容理解を深めさせるとともに、グループでの言語活動（ディスカッション）を取り入れ意見交換の場を設ける。既習単元（Lesson 1）においても、環境問題に関する英文を読み、自分の感想や考えを書かせる活動を設定しており、既習単元において設定した言語の使用場面や、活用した言語材料・表現形式等を本単元に効果的に取り入れることによって、生徒の思考・判断・表現の充実を図ることが可能である。

○ 本単元における、見通し・振り返り学習活動

単元終末において、読んで理解した内容を基に自分の感想や主張を70語以上の英文でまとまりよく書くという課題に取り組むために、既習単元で習得した知識・技能が有用であることに気付かせる。具体的にはI am（感情を表す形容詞）to～の表現や, extinction, ecosystem など環境に関わる語彙や表現などを活用する場面を設定する。併せて本単元で習得した知識・技能を活用させる活動を設定することにより、より充実した自己表現ができるようにする。単元終末において、課題解決のために活用すべき言語材料はグループによる意見交換の場面などでも積極的に活用するように促し、より確かな知識・技能の定着を目指す。複数単元における学習内容の関連を意識した表現活動を行うことで、既習単元で用いた表現等を本単元でも用いるなど、継続した学習の有用性を感じさせることができると考える。

(イ) 学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定

既習単元	本単元
単元名 : Lesson 1 Come Back Again, Little Turtles!	単元名 : Lesson 4 Sushi
評価規準	
○ 小笠原諸島におけるウミガメ保護活動とウミガメ保護の重要性に関する英文を読み、自分の考えを英語で表現することができる。	○ 世界に広がる寿司文化と漁業の現状に関する英文を読み、自らの考えと今後取るべき行動について、英語でまとまりよく表現することができる。
判断の要素	
ア 本文の内容に関する記述	ア 本文の内容に関する記述
イ 自分の考えや感想の記述	イ 自分の考えや主張の記述
ウ 分かりやすい英文展開	ウ 分かりやすい論の展開
エ 英文の量 (50語以上)	エ 英文の量 (70語以上)

判断基準B	
ア 本文の具体的内容を取り上げている。 イ ウミガメを取り巻く問題について自分の考えや感想を記述している。 ウ 基本的なdiscourse markerを用いて分かりやすく英文を書いている。 エ 50語以上の英文で述べている。	ア 本文の具体的内容を取り上げている。 イ 世界の漁業の問題点と今後取るべき行動について自分の考えや主張を書いている。 ウ 適切な英語を用いて、相手に分かりやすく説得力のある英文を書いている。 エ 70語以上の英文で述べている。
【予想される生徒の表現例】 I was surprised to know that sea turtles are so important animals for ecosystems. Sea turtles are essential for both marine ecosystems and beach ecosystems. Sea turtles are an important for the systems. If sea turtles go extinct, we will lose so many things.	【予想される生徒の表現例】 I love sushi. Sushi is a Japanese traditional dish, so I have thought we can eat them forever. However, marine ecosystems are in danger because of overfishing. I'm surprised to know that blue fin tuna is at the risk of extinction. We have to save and protect marine food resources. (中略) All of the people in the world have to act for our future food resources.
判断基準A	
○ (判断基準Bに加えて) 自分が取るべき行動について述べている。	○ (判断基準Bに加えて) 自分の考えや主張を理由と共に述べている。

(ウ) 「判断基準」に基づく「思考・判断・表現」の指導と評価

- C状況と評価される生徒に対する補充指導

I think that we shouldn't overly catching fish in the sea. Because overfishing is decrease to many fish. Also, overfishing is cause to break the food chain. For sustainable fishing, I have two ideas. First idea, when do fishing, that fisher should to consider not only for make a profit, but also ocean ecosystems. Second idea, it is cultivate of fish. (原文のまま)

【判断基準Bの各項目】

○ア 本文の具体的内容を取り上げている。 ○イ 自分の考えや主張を書いている。  
△ウ 英語の適切さや分かりやすさに欠ける。△エ 70語未満である。

上記の判断基準Bに照らして、ウの項目に関しては、具体例を列挙する際は First, we should～. Second, we should ～.という表現パターンの提示をした。またエの語数に関しては、既習単元で用いた表現・単語や友達の作品を鑑賞させながら必要な情報を追加させ、より充実した英文を書かせた。下は補充指導後の作品の一部抜粋である。

I have two ideas. First, we should consider not only making a profit, but also ocean ecosystems. Second, we should cultivate fish.

- B状況と評価される生徒に対する深化指導

A状況にある友達の作品を鑑賞させ新たな視点や考え方に気付かせたり、よりまとまりのある英文作成に必要な言語材料を提示したりした。

(エ) 成果と課題

- 複数単元の関連を意識したことで、課題解決意識の高まりが見られた。  
○ 既習単元で用いた表現等を本単元でも用いるなど、知識・技能の定着が見られた。  
△ 「判断基準」の妥当性を更に高めるために、学年間における学習内容の関連を図る必要がある。